（ 続紙 1）

京都大学	博士（教育学）	氏名	勝（橋本） 尚子
論文題目	心理療法と現代の意識 ―「非二」という視点からの考察―		

（論文内容の要旨）

近年の心理療法では、発達障害や、発達障害的な発達の非定型化が注目を集め、従来の心理療法や病態水準的な見立てが通用しない場合が増えている。本研究はそれに対して、「非二」という視点を提供して、心理療法の可能性について検討したものである。

第Ⅰ部理論編の第1章で、従来の心理療法が前提としていた意識と、発達障害も含む、現代的意識の違いが示された。従来はクライエントの心的葛藤を前提として心理療法が成立してきたが、現代では葛藤しないクライエントが増えてきている。

葛藤が成立するためには、二つのものの対立が前提となる。Jung や河合隼雄（1988）による、一ではなくて二が最初の心理学的な数であり、意識の成立に関係するという論を踏まえて、心的葛藤があり、従来のカウンセリングが通用する心的構造が「二の意識」、葛藤しないという現代的心性が「非二の意識」として提唱された。

「非二」の意識には、本質的な発達障害から、あえて二を際立たせないという現代的心性まで幅があるが、「主体意識の希薄さ」という点では共通する部分が多いといえる。また乳幼児など、発達の一段階としての「非二」的状態もあれば、「非二」が常態となっているものもあり、「非二の意識」は、その両方を含んでいる。

第2章では、「非二の意識」の発達的側面について、Balint の「創造領域」が検討された。この「創造領域」は従来精神分析ではあまり注目されてはこなかった。しかし転移・逆転移もなく、何かが生み出される領域であると Balint は述べており、現代の「非二」的心性から対象が発生することを考える時に病態水準以外の視点を与えてくれることがわかった。

第Ⅱ部事例編では、本テーマを考えるにふさわしい自験例7事例（「二」が3例、「非二」が4例）が取り上げられ、考察された。第Ⅲ部考察の第11章では第Ⅱ部での事例編から、「二」と「非二」の世界の特徴が検討された。

両者の比較では、夢などの構造について、「二」を特徴とする事例においては、最初から場所や他者、また内側や外側が明瞭であるのに対し、「非二」を特徴とする事例においては、それらが面接の経過に従って発生していくことが見出された。他者について、「非二」においては、最初は他者がいない状態から、治療の進展に伴い暴力的な他者が現れ、それが治療の転回点になることが見出された。

関係性については、「非二の意識」の場合には、「二の意識」の事例以上に治療者の反応、治療者の「自己主体感を呼び戻される体験」や、心のあり方がクライエントに影響を及ぼすことが見いだされた。

リアリティ・リフレクションでは、主に、「身体」、「言葉」、「鏡」などについて考察された。「身体」について、「非二」においては、「自己感としての身体感覚」の生成が、すでにそれらが成立している「二」の事例よりも大きな意味を持つことが考えられた。「言葉」について、「二」においては既に主体が成立しており、その主体から語られる言葉を前提とした従来のカウンセリングが成立するのに対して、「非二」においては、言葉が発生することや、言葉のやり取り自体が主体を生成させるプロセスでもあることが考えられた。「鏡」のイメージについては、自己像の同定というのが「二」における鏡イメージの機能であるのに対して「非二」では、鏡に「他者」をいかに見出していけるかというのがテーマとなることが考えられた。

また「非二」において、主体が発生する際に「傷」や「暴力」が関わることが示唆された。セラピストが定点として存在し、そこで語ることによって、傷がクライエント自身のものとなり、経験となることは、リフレクションを生じさせることにもつながることが考えられた。

葛藤する能力のあるクライエントを対象としてきた従来の心理療法が通用しにくくなってきている中で、本論文では、現代的な意識の特徴について考え、新たな心理療法の可能性について考察を行ってきた。現代の意識、「非二」に対しての治療では、クライエントの新たな意識の発生の契機に、治療者の自己主体感、主観性、生身を曝すことなどが非常に重要であることが見出され、それを理論化する試みがなされた。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、近年において、クライエントの内省する能力を前提とする従来の心理療法が通用しなかったり、また神経症水準と精神病水準、さらにそれに境界例水準を加えた病態水準の考え方では理解しにくかったりする事例が増えていることに対して、「非二」というユニークな視点を立てて検討し、考察したものである。著者の約 25 年にわたる臨床経験を踏まえて、大部で濃密な内容になっている。

発達障害的であったり、内省のむずかしかったりするクライエントの増加に伴い、様々な理論や概念が作られてきているが、その多くは線的であり、段階的である。たとえば精神分析の Meltzer における一次元から四次元に至る図式もそうであると考えられる。それに対して本論文における「非二」という概念は複雑で逆説を含んでおり、興味深い。通常の、二つのものの間で葛藤できたり、対立できたりする意識が「二」の意識であるとして、「非二」の意識には、本質的な発達障害から、あえて二を際立たせないという現代的心性まで幅がある。また乳幼児など、「二」に至るまでの発達段階としての「非二」的状態もあれば、「非二」が常態となっているものもあり、「非二の意識」は、その両方を含んでおり、非常に幅が広いと言える。つまりこれは単純な発達モデルや水準のモデルではなく、二でないものを「一」として定義するのではない逆説性が含まれるのである。それが本論文の臨床的な価値を高めていると言えよう。

本論文は、この独創的な視点を裏づけるために、非常に精緻な研究を行っている。特に評価できることとして、三点だけ挙げたい。

第一に、「二」、「非二」という区別を、7 つという比較的多くの自験例の詳細な記述から示しているところである。理論に対して、1、2 事例が例証として挙げられたり、事例のある部分が理論に一致したところとして示されたりすることはあるが、これだけ多くの事例の全体を示して、検証されることは少ないと考えられる。それは本論文に説得力と、読物としてのおもしろさを与えてくれている。部分的にふれられている他 3 つの自験例も、説明に使われている。

第二に、主に Balint などについての文献研究から、この「非二」の視点を裏づけたことである。Balint は、エディプス水準（三者関係）と基底欠損領域（二者関係）を対立させた理論で有名であるが、「創造的領域」として述べられているものが、本論文での「非二」の意識と非常に共通していることが示された。また Jung の『ヴィジョン・セミナー』で例として扱われたクライエントの記述と Jung による解釈にも、この「非二」の意識に通じるものがある。その意味で「非二」の意識は現代的なものであるけれども、臨床家が以前からその存在に気づいていたものであるかもしれないのである。

第三に、この「二」と「非二」という視点が、単なる診断や見立てとしての分類に終わっているのではなくて、心理療法の方法に新しい示唆を与えてくれるところである。従来の心理療法において、治療者の中立性が大切なのに対して、「非二」を特徴とする事例においてはそれでは十分ではなくて、治療者の反応、治療者の「自己主体感を呼び戻される体験」や、心のあり方がクライエントに影響を及ぼすことが見いだされた。これは葛藤を持たず、発達障害的であることが多い最近のクライエントに対して、どのような心理療法的アプローチが有効であるかを示してくれている。さらには、そもそも心理療法において、治療者の心のあり方が重要であることも示唆してくれていると考えられるのである。

本論文において「非二」というあり方をしていると考えられたクライエントが、心理療法を通じて多少とも「二」のあり方を獲得していることが示されたのは、「非二」のあり方は「二」に移行すべきなのか、それとも独自のあり方として考えるべきなのかという問いを引き起こす。それは「非二」の視点が、発達的や病態水準的でないゆえに持っている有効性と問題性を同時に示している。それは本論文に残された大きな

課題とも言えるが、むしろそのような問題を提起していること自体が重要であると考えられる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年 7 月 24 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降